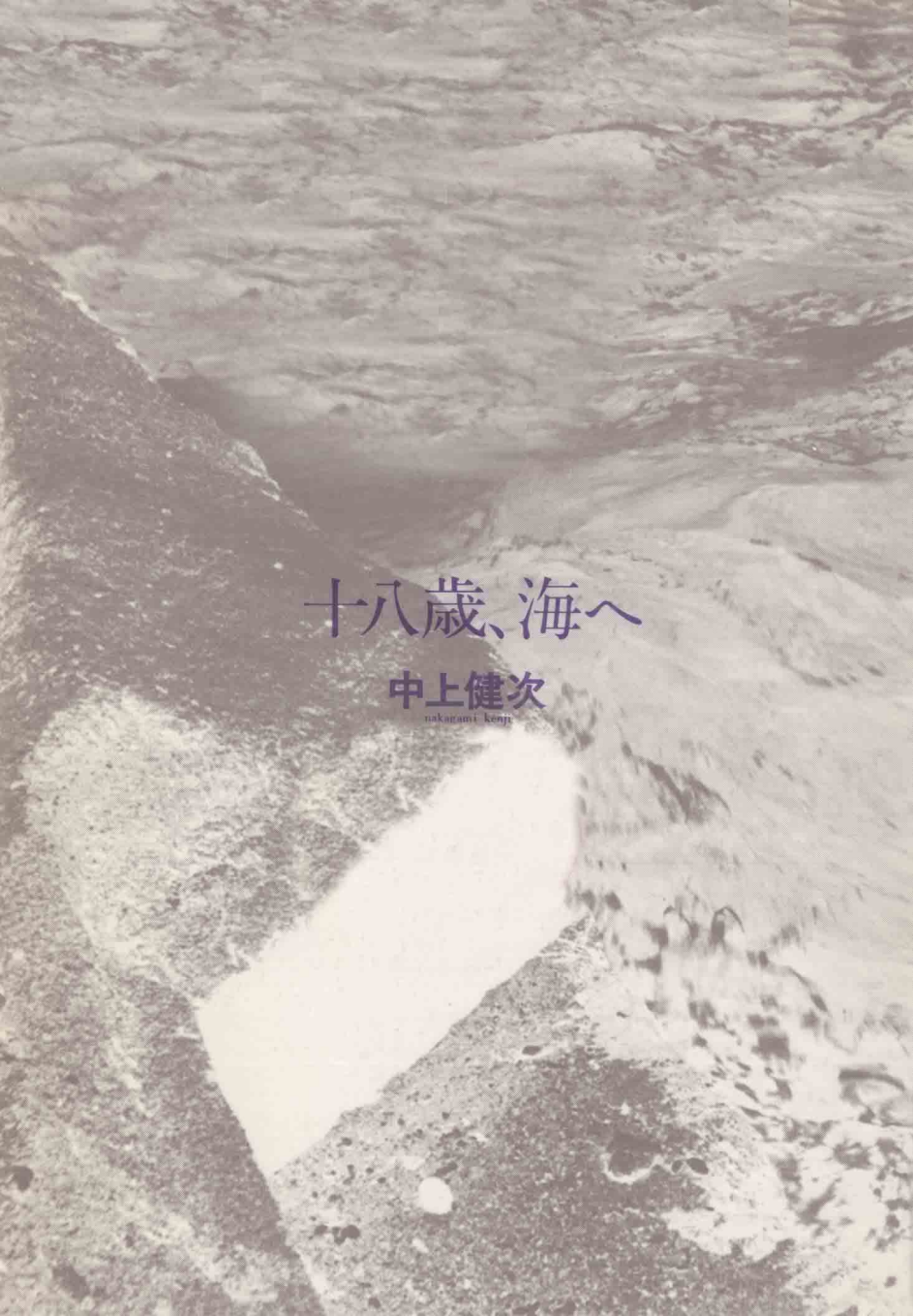
十八歳、海へ

中上健次



十八歳、海へ

中上健次

nakagami kenji

十八歳、海へ

一九七七年一〇月二五日初版発行
一九七七年一二月五日二版発行

著者　中上健次
発行者　堀内末男
発行所　株式会社集英社　郵便番号一〇一東京都千代田区一ツ橋二丁目五番地一〇号　電話〇三―二二三〇―六三六一（出版部）
二三〇―六一七一（販売部）
印刷所　中央精版印刷株式会社／株式会社美松堂印刷所
定価　七五〇円
© KENJI NAKAGAMI 1977, 0093-772113-3041　落丁本、乱丁本はお取りかえいたします。

十八歳、海へ

目次

十八歳 5

JAZZ 39

隆男と美津子 47

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

愛のような 63
不満足 113
眠りの日々 127
海へ 171

写真　中平卓馬

十八歳

歌

Michelle, ma belle
These are words that go together well
My Michelle.
Michelle, ma belle
Sont les mots qui vont très bien ensemble

俺は胃の奥からしぼり出したような大声で、西川に教わった歌をうたった。そうどなりながら、小雨が乾いた舗道を遠慮しがちに塗ってゆく中を、自転車で疾走した。俺の中古の自転車はサドルのスプリングが馬鹿になってしまっているので、こんな良い道で

も尻が鳴る程に痛くなる。いつでもきっと女の尻のように赤くなっている。
西川の家の立派な玄関に濡れそぼちながら辿り着いた時には、仲間はビールを飲んでよっていた。
「とおる、濡れてるな。ドブの中にはまり込んだみたいだな」西川がビールの泡を口唇の先にくっつけ、からかった。細い雨をせいいっぱい吸い込んだ学生服は重く、疲れてしまった。肩だけがつかれている。
「ああ、キャッツ・アンド・ドッグズ」
上着をはぎとる。固くごわごわとまつわりつくズボンを脱いで、西川のベッドの上にまるめて放り投げた。ナタリー・ウッドの写真をかくすようにぶら下がっている西川のズボンをはいた。
充が俺の顔をじっと見る。酔っているのか光の鈍い目で「裸になってしまったら良いよ」とわらう。「おまえの精液の臭いでむんむんするペニス、いやだね。勃起ばかりさせて。まだ十八歳なんて」と皮肉を言った。酔っ払いのやせぎすの九官鳥。
「俺だっていやさ」
「俺の寝巻きでも着りゃ良い」西川はそう言う。押入れのがらくたの山から、彼の緑色のガウンを取り出す。俺の裸の上半身に「似合うぜ」とかけてよこす。
甘酢っぱいような西川の体臭のいっぱいつまったガウンを着る。気おくれしている、

と思った。俺の体臭と言うと、せいぜい水っぽい精液の臭いか、背中のあたりに洗い忘れた石けんの臭いだった……。

「おい、もう試験勉強始めたのか？」

「ああ、少し。英語をね」

田城は眉をしかめる。薄い口髭にくっついたビールの泡を舌でなめる。

松本が俺のグラスにビールをついだ。俺は酒は知らない。グラス一杯ばかりを飲んだことしかない。西川は飛びだしたのど骨を、ごくんごくんと鳴らしながらひと息にグラスをあけた。俺は一番年長だった。四月に十八歳の誕生日をむかえた男だった。だが知っているのは、猿のようにやる自瀆だけだ。

充は、俺が苦労して一杯のビールを飲み干すのを笑いながら見ていたが、西川の頼みで押入れの中から電蓄をとり出した。

西川は黒人霊歌とモダンジャズが好きだ。「スウィングロウ、スイートチャリオット」とか「バド・パウエル」を聞き入っている西川の顔は仲間の誰とも違う。近づき難い大人の顔が俺の触角に感じ取れる。

セロニアス・モンクの「ロコモティブ」をかける。モンクのピアノが部屋中になり響いた。ロックンロールをかける。西川と田城、充と松本が踊り始めた。この酔っ払い。部屋がさして広くないため、互いに体をくっつけ合っているみたいだった。リズムにあ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

わせて体を動かし、誰かが足をふまれると硝子窓が震える程叫び、笑う。
無理やりにグリニッジ・ビレッジに集まる黒人やビート族になろうとしているようだった。
でもこいつらは知っている。陶酔しようとして拒まれる。喚声や踊りが虚しく馬鹿馬鹿しい。
俺が大きな欠伸をもらすと、西川は怒ったようにレコードを途中で止める。若い流行歌手の歌う「僕たちは若い」をかけた。

僕たちは若い
あの輝く海のように
あの白い太陽のように

酔っ払ったように男同志で抱き合いブルースのようにして踊った。充と松本は互いに股間と股間をこすりつけ、「痛い、痛い」とわらう。

僕たちは生きている
緑の葉の中に
僕たちには限りない明日がある
なんて素晴しいんだろう
君も僕も若い

ああ　僕たちは明日に向かって
めくるめく青春を生きよう

西川の親父は、その市の繁華街に立つ銀行の支店長をやっている。市長や数多くの市会議員を知っている相当な権力者だ。だから西川は半分、馬鹿の真似をよそおう。

僕たちには力がある
希望にあふれる胸がある
僕はいつでも歌いつづける
力いっぱい声をあげて
この青春を
この若さを
僕たちは若い
あの輝く海のように
あの白い太陽のように
ああ　僕たちは若い
僕たちは若い

流行歌手は熱っぽく力強く青春をうたいあげた。西川は田城の尻に手をまわす。「イヤ、イヤ」と女の真似をして尻をふる田城の頬に、今度は唇をつける。

「イヤ、イヤ」と田城は言う。「純子さん、妊娠させたくせに、いやよ」流行歌手の歌をからかってでもいるように、いつまでも男同志で踊っている。

西川たちの表情を見ながら、部屋の中で俺はわらっている。ビールをのみつづけた。ビールが空になると、ベッドの下にかくしている西川の親父のものであるブランデーを、清涼飲料水のようにのむ。踊りをやめようともせず次のレコードをかけた西川たちと、青春をうたいあげた流行歌手の滑稽さに突然気づき、笑い出そうとした。しかし笑いは口唇のあたりで挫折し、あくびした。あくびの涙が、なんとはなしに悲しくなって泣いたように思える。ぬるぬると液体が眼の奥からにじみ出てきて視界をくもらせ、部屋中をゆがませた。

川

その夏、秋弘は死んだ。何年も前の事だったが、つい昨日の出来事のように記憶している。

俺は弟を連れて、お城山へ蟬をとりに行くところだった。

「ついでに、エッチも持っていこらね」

弟はヒサシのいやにつき出した大きな野球帽をかぶり、弾んだ心を押えかねて、声は

うわずっている。

「ああ、俺はもう大人なんや。もうがきと違うさか、エッチはできん。このまえ買うた青い海水パンツを持ってゆく」

ランニングシャツから弟の黒人のような腕がとび出している。

「セミ、取ったら何に入れるん？　手でもてんよ」

「箱でも持って行こら、穴あけてね」

風の入らない玄関に、俺たちは居た。汗がじっとりと出て、首や額のあせもをひりひりさせる。

「兄やん、よしかずやたかしらは、さそわんの？」

蟬取り用の長い柄のついた網を用意し終えると、俺らは遊び友だちをさがした。皆は、すでに熊野川へ泳ぎに行っていた。

息をきらせながら竹中の小路を駆けぬけた。小路を出るといきなり熊野川が視界に飛び込んで来る。陽の光を浴びて熊野川が輝いている。夏のにおいが鼻をつく。材木の香りだ。俺と弟は、夏の純白の光をあび、雄々しく流れ、青く白く光っている熊野川を見る。体のどこかがぴくぴく震える。互いに顔を見あわせた。俺たちはその一瞬に言葉を見失っている。弟は生唾を飲み込む。おびえたような声で、意味もなく俺にゆっくりとうなずく。俺と弟は同時に蟬取り用の網を放りなげ、急いで裸になったのだった。夏そ

のもののような熊野川をめざして走り出した。ふくよかな材木の香りの中に向かって喚声をあげながら走る。

筏の上によしかず、たかし、秋弘が居た。

冷たく青い川。それであの筏のにおい。すべて幼い俺たちを夢中にさせたのだった。

俺たちは筏と筏の短い距離を競争して泳いだ。泳ぎに疲れると乾いた白い廃船にのぼって甲板に寝ころび、体を温めた。

「兄やん、この船、動いたらええのにねえ」弟の言葉に、

「そうや、もじれてなかったら皆んなで海まで出て行くんやけどね」秋弘はそう言った。唇をかんだ。

「金をもうけたらこんな船ら、どっさり買うよ、俺」よしかずは甲板に頬をつけ、眼を閉じた。大きな甲板だった。船は燃えるように熱い。なにもかも熱のさなかにある。

なかば水に浮き、なかば陸に乗りあげている船だった。船が燃え上り、その船にへばりついた俺らが炎のように燃えていた。夢はなにもない。昔のことも、将来の事も考えない。炎はただ燃えている。

体が温もると今度は筏の下を潜った。危険なこの遊びは危険な分だけ俺たちを熱中させる。筏の下に目をあけて潜り、筏に吸い込まれないようにして泳ぎ抜ける。

何度目かの弟の番の時だった。俺たちの敵である他校の子供等がやって来たのを知っ

た。俺たちの遊び場から追っ払うために仲間らは水からあがった。

他校の子供等が逃げ去ったあと、俺たちはその遊びをまた繰り返した。

「秋弘の番や。丸太が十本か。十本の下をくぐり抜けるんやど」俺は秋弘を促した。秋弘は耳に唾液を込め、「ようし」と叫び、筏の下に潜る。

相当な時間がたっても、秋弘はくぐり抜けてこなかった。弟はおびえた顔を俺の腕にすりよせながら「あきひろ、ほら、河童につかまったんやわ」と言った。よしかずが冷たさのため、歯をかちかちと鳴らしながら「出てくるまで船の上でまちいやろか」と言った。俺は、知っていた。知っているのは、俺一人だった。その仲間の中では、俺が一等、大人だった。産毛のようだが、産毛ではない毛が、下腹部に生えていた。なにもかも知っている。俺と同い年の秋弘は、目と鼻のそこで、水に呼吸を止められている。

廃船の甲板で背中を陽に焼きながら、ひじをついて筏の下をみつめていた。秋弘はなかなかくぐり抜けられない。筏の丸太によせる小波の音がいやに高く聞こえる。俺は、くぐり抜けた。ちりちり音がするほど背中が焼け、痛い。

「セミ、今日は取らんの？」突然、弟が訊いた。「あ、いまから取ろか」俺は仲間をさそった。

家へ帰っても秋弘の事はすっかり忘れていたわけではなかった。ただじいじいと鳴き騒ぐ蟬に熱中していた。弟は夕飯になってやっと、両親に「筏の下に潜ってから、どこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com